



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ルーシの地の滅亡の物語」について Слово о погибели Рускыя земли
Author(s)	中村, 喜和; Nakamura, Yoshikazu
Citation	スラヴ研究, 5, 73-95
Issue Date	1961
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4956">https://hdl.handle.net/2115/4956</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113159.pdf



# 「ルーシの地の滅亡の物語」について

## Слово о погибели Рускыя земли

付 試訳Ⅰ ルーシの地の滅亡の物語  
試訳Ⅱ アレクサンドル・ネフスキー一代記

中 村 喜 和

### Ⅰ. ま え が き

ある意味において、古代ロシア文学の歴史は受難の歴史である。それは民族として歴史に登場して以来、たえず周辺の異民族から深刻な脅威にさらされてきたというロシア史の苛酷さに由来するばかりではない。その最も人間的な部分はずねに権力と卑俗の無知の側から迫害を受けてきた。代表的とされる作品のいくつかがきわめて偶然的なかたちでしか伝わらなかったということ自体、それを象徴的に示している。A. プーシキンがその晩年に、やはりたった一部の写本でかろうじて伝わった「イーゴリ遠征譚」 Слово о полку Игореве を目して「わが古代文学の荒地における孤独な作品」<sup>1)</sup>と述べたとき、受難のヴェールはまだ深々と古代ロシア文学の面をおおっていた。元来、完全に孤独な文学作品などというものは歴史の論理に反する。古代ロシア文学史の研究とはこのヴェールをはがし、その発展を断絶なしにあとづけることであった。事実、プーシキン以後の研究によって、この作品が決して全くの「荒地」に生い出たものではなく、その文学的完成度にふさわしい文化的・社会的背景をもつことが明らかにされつつある。それはまた「孤独」なものでもなかった。さまざまな事情でキーエフ時代の文学は断片的にしかわれわれに知られていないが、「イーゴリ遠征譚」はトゥーロフのキリールの説教や「流罪人ダニールの祈願」 Моление Даниила Заточника などにみられる作品構成、イラリオンの著作や原初年代記をつらぬいている思想性と深く結びついている。約2世紀のちの作品「ザドンシチナ」Задонщинаはこの作品の創造的エネルギーを最もよく証明しているといえよう。また、その文体と思想において一層「イーゴリ遠征譚」に近い「ルーシの地の滅亡の物語」(以下「滅亡の物語」と略称)は、キーエフ時代からモスクワ時代に受けつがれる古代ロシアの文学的伝統の存在を確実に示す鎖の一環と考えられる。

「イーゴリ遠征譚」が深刻化するルーシの封建的細分と諸侯の内紛、および絶えざる遊牧民の来襲による民族の危機をすどく意識して書かれたとするならば、「滅亡の物語」は(現存するテキストから知りうるかぎり)すでにその危機が破局となって現実化した時期に、民族の過去の栄光への追憶と、祖国にたいするなお衰えぬつよい愛情から

1) А. С. Пушкин, О ничтожестве литературы русской, Полное собрание сочинений, Т. V. М. 1954, стр. 178

生まれている。このふたつの作品をへだてている12世紀の末から13世紀の前半までの約半世紀はロシア史上でもたぐいの少ない動揺と混乱の時期である。それは、決定的に小侯国に分裂したルーシが東の蒙古・西のゲルマン騎士団から、いわば背腹に外敵の攻撃を受けた時代というだけでは充分ではない。この時代こそ第4回十字軍による正教の聖都コンスタンチノポリス陥落をもひきおこした西欧カトリック世界の異常な勃興、前代のペチェネークやポーロヴェツとは比較にならぬ徹底的な破壊力をもった東方の異民族の突然の出現にはさまれたロシア民族が、そのもてる力のすべてをつくして生き抜いた時代である。「滅亡の物語」にみなぎっている詠嘆の抒情はこのような緊迫した感情にささえられているのではないだろうか。

もっとも、X. ロパリョフによって前世紀の末にはじめてそのテキストが刊行されて以来「滅亡の物語」が一貫して高い評価をあたえられてきたわけではない。刊行者自身はこの作品を「ルーシの美と栄光をたたえ、その滅亡をいたむ壮大な詩の冒頭の部分」<sup>2)</sup>と考えていたにしても、同時代の他の文学史家、たとえばИ. ジダーノフ、М. グルシエフスキ、П. ヴラヂーミロフらの態度はきわめて冷淡なものであったといわれる。<sup>3)</sup>しかし比較的最近になって、しかも注目すべきことにはドイツのW. フィリップ、<sup>4)</sup>フランスのM. ゴルラン、<sup>5)</sup>スイスのA. ソロヴィヨフ<sup>6)</sup>など外国の研究者によってふたたびこの作品が注目されはじめ、それぞれの立場から新しい解明がこころみられた。「滅亡の物語」のこの「復活」はソヴェトの学界でもみられ、40年代の後半以後、B. マルイシェフによる新しいテキストの刊行、<sup>7)</sup>M. チホミーロフ、<sup>8)</sup>H. グーディ、<sup>9)</sup>Ю. ベグーノフ<sup>10)</sup>らの研究があらわれている。ソロヴィヨフ自身みとめているように、これらの諸

2) X. M. Лопарев のテキスト研究は Памятники древней письменности の XXXIV 巻として1892年に出版されたが、筆者はそれを直接参照することができなかったので、以下彼の所説は Гудзий, Soloviev その他による。この引用は注<sup>9)</sup>の論文 стр. 528 より。

3) *ibid.* しかし A. H. Пыпин は例外で、その文学史のなかでかなりのスペースをこの作品にさぎ、民謡との関係に注目している。История русской литературы, т. I, С.-Петербург, 1911<sup>4</sup>, стр. 198-202

4) W. Philipp, Ansätze zum geschichtlichen und politischen Denken im Kiewer Russland, Berlin, 1940; Über das Verhältnis des „Slovo o pogibeli Russkoj zemli“ zum „Zitie Aleksandra Nevskogo“ *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte*, V, Berlin, 1957, S. 7-37

5) M. Gorlin, Le Dit de la ruine de la terre Russe et de la mort du grand-prince Jaroslav, *Revue des études slaves*, XXIII, 1947, p. 5-33

6) A. Soloviev, Le Dit de la ruine de la terre Russe, *Byzantion* XXII, 1953, p. 105-128; Заметки к «Слову о гибели Русская земли», *Труды отдела древнерусской литературы* (以下 *ТОДРЛ* と略称) XV, 1958, стр. 78-115

7) В. И. Малышев, Житие Александра Невского (по рукописи середины XVI в. Гребенщичковской старообрядческой общины в г. Риге), *ТОДРЛ*, V, 1947, стр. 185-193. なおこのテキストは注<sup>12)</sup>の論文および Ю. Бегунов の Автореферат диссертации (注<sup>10)</sup>) とともに Малышев 教授のご厚意で手に入れることができた。

8) М. Н. Тихомиров, Где и когда было написано „Слово о гибели Русской земли“, *ТОДРЛ*, VIII, 1951, стр. 235-244. この論文は Тихомиров 教授のご厚意で読むことができた。

9) Н. К. Гудзий, О «Слове о гибели Русская земли», *ТОДРЛ*, XII, 1956, стр. 527-545

10) Ю. К. Бегунов, Возможный источник одного из мотивов «Слова о гибели Русская земли», *ТОДРЛ*, XIV, 1958, стр. 143-146; Следы «Слова о гибели Русская земли» в Степенной книге. *ТОДРЛ*, XV, 1958, стр. 116-130; Время возникновения «Слова о гибели

「ルーシの地の滅亡の物語」について

論文はいずれもこの作品の個々の若干の側面をテーマとしたもの、あるいは研究史のレビューであって、将来総合的なモノグラフの出現が期待されているのが現状であるが、<sup>11)</sup> 本稿ではいままで論じられたいくつかの問題点を紹介し、あわせて今後の研究の方向をさぐってみたい。

## Ⅱ. 聖者伝との関係

「滅亡の物語」は二本の写本で伝わっている。1892年ロバリョフによって始めて刊行されたものはプスコフのペチェルスキ修道院に所蔵されていたもので、15世紀の写本とされる。第二の写本はリガの旧教徒の共同体で発見され、<sup>12)</sup> マルイシェフによって1947年に刊行された16世紀のものである(この写本はおなじ年にゴルランによっても刊行された)。ふたつの写本のあいだには正書法と句読点の若干の異同(試訳Ⅰへの注参照)をのぞいて相違はみとめられない。ソロヴィヨフはリガ本がプスコフ本からの不完全な転写にすぎないと考えており、<sup>13)</sup> グーディもほぼこの説にしたがっている。<sup>14)</sup> これによると、「滅亡の物語」は厳密な意味ではただ一本の写本だけで伝わったことになる。しかしプスコフ本では Слово о погибели Руския земли という標題のあとに「ヤロスラフ大侯の死について」о смерти великого князя Ярослава という句がつづき、さらに本文に直接ひきつづいてアレクサンドル・ネフスキ伝の不完全なテキストがみられること、一方リガ本では「全ルーシの大侯聖アレクサンドル・ヤロスラヴィチ伝」Житие блаженнаго великаго князя Александра Ярославичя всея Руси と題された写本の冒頭にこの作品が収められていたことから、この作品の本質的性格にかかわるいくつかの重要な問題がおこっている。

まず第一に研究者のあいだに論議をひきおこしたのは、ルーシの自然の豊かさと政治的強盛をたたえた200語あまりのこの断片的な作品が、不幸にして現在まで伝わらなかったある作品の一部をなすものであるか、それともヤロスラフ大侯の死にかんする物語への、あるいはその子アレクサンドル・ネフスキ大侯伝への序文であるのか、という問題であった。最初ロバリョフは「滅亡の物語」がヤロスラフの死についての物語、ネフスキ伝とならんで同一の作者による三部作をなすものであることを主張し、このうちネフスキ伝のみが完全に伝わり「滅亡の物語」は最初の部分だけが残り、ヤロスラフの物語は全く失われてしまったのであると考えた。<sup>15)</sup> この説にははじめから、(1)写本の標題にネフスキ伝がぬけていること、(2) о смерти... の о は по に訂正されてい

Руския земли» и понятие «погибели Руския земли», *ТОДРЛ*, XVI, 1959, стр. 147-160; «Слово о погибели Руския земли» Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук.

11) Soloviev, *ТОДРЛ*, XV, стр. 79

12) この写本の発見のくわしい事情については Малышев, О второй списке Слова о погибели Руския земли (История открытия), *Slavia* XXV III/I, 1959, p. 69-72 参照

13) Soloviev, New traces of the Igor tale in old Russian literature, *Harvard Slavic studies*, VI, 1953, p. 80 および *ТОДРЛ*, XV, стр. 91

14) Гудзий, *ТОДРЛ* XII, стр. 545. なお Малышев もこの可能性をみとめている. *op. cit.* p. 70

15) Пыпин は Лопарев のこの説をそのまま受け入れている. *op. cit.* стр. 198

る形跡があり、このことからこの写本の成立当時すでにヤロスラフの死にかんする物語が知られていなかったと推察されること、などの欠陥があったが、ついにリガ本の発見によって明白に成立しがたいものと考えられるにいたった。

ロパリョフの三部作説にたいして最初に疑問を表明したのは Н. Себрянский であった。<sup>16)</sup> これは一般に聖者伝成立の興味ある過程とも関連するのでややくわしく紹介することにしよう。彼はまずネフスキの父ヤロスラフ (1191—1246) が凡庸な侯にすぎず、その死について何か特別な記録が残されるほどの君主ではなかったと考える。そしてプスコフ本の標題にみられる *о смерти великого князя Ярослава* は *о смерти великого князя Александра Ярославича* の誤記であるとし、したがって「滅亡の物語」はネフスキ伝の序文であると主張した。彼によると、この伝記の作者はネフスキの従士で、侯の死後まもなく書かれたものであるが、世俗的な要素があまりにもいちじるしかったため、これをもとにして13世紀の末教会関係者が宗教的色彩の濃い聖者伝に書き直したものであるという。14世紀にはこれらふたつの伝記がともに流布していたが、次第に教会聖者伝が優勢となり、それがプスコフあるいはノヴゴロドの年代記に収められたのである (両年代記にふくまれているネフスキ伝については試訳Ⅱの注参照)。このさいには当然、世俗的な序文、すなわち「滅亡の物語」はとりのぞかれたわけであるが、プスコフ本の写字生だけは何かの事情で教会聖者伝の前に機械的に世俗的伝記への序文を置いた、というのがセбрянскийの意見であった。しかしヤロスラフが凡庸な侯であったという説には異論があるし、<sup>17)</sup> *о смерти...* の読み方にしても、グーゲイの指摘<sup>18)</sup> をまつまでもなく、そのままでは受け入れがたい。また二系統のネフスキ伝という仮説にたいしては、現存する伝記が後世の編集になるものではなく、13世紀にすでに教会的要素と世俗的要素の結びついた新しい聖者伝のジャンルが成立していたとするフィリップの異説がある。<sup>19)</sup> さらにもっと重要なことは、もし「滅亡の物語」がネフスキの死後に書かれたものであるとすれば、そのなかの *нынешний Ярослав* という句が理解できないことである。ネフスキ伝が彼の父のヤロスラフの存命中に書かれるというアナクロニズムを生じさせないようなこの句の解釈はまだ確立していない<sup>20)</sup>。当然生ずるもうひとつの疑問、すなわちネフスキのように勇名の高い侯とルーシの滅亡という観念の結びつきの不自然さについては、ネフスキ伝の最初の刊行者 В. Манцинカが、この聖者伝の末尾で侯の死にのぞんで人びとの叫ぶ「もはやわれらは滅びるであらう」 *Уже погибаем* をあげて説明している。<sup>21)</sup> しかしこの説明はややくじつけの感

16) 「滅亡の物語」にかんする Н. Себрянский の最も主要な論文は *Древнерусские княжеские жития*. М. 1915. しかしこれは直接参照できなかった。以下は Гудзий による。

17) ヤロスラフ侯の人となりと業績を特に高く評価していることは Soloviev の諸論文の特徴のひとつ。 *Byzantion*, p. 126; *ТОДРЛ*, XV, стр. 94-101 (...незаурядная, крупная личность, стр. 95)。しかし Гудзий はこれと全く正反対の評価を下している (...заурядный князь. *ТОДРЛ*, XII стр. 539)。

18) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII, стр. 532

19) Soloviev, *ТОДРЛ*, XV, стр. 113-114 による。

20) *нынешний* を «Слово о полку Игореве» からの借用で格別の意味がないとする説 (А. Соколовский), ヤロスラフ賢侯と区別するためのエпитетとする説 (М. Грушевский) などがある。

21) Гудзий, *История древней русской литературы*, М. 1956<sup>g</sup>, стр. 190; *ТОДРЛ*, XII, стр. 535

「ルーシの地の滅亡の物語」について

じがする。以上のように「滅亡の物語」をネフスキの聖俗いずれの伝記にも結びつけることにはいくつかの難点があるにもかかわらず、伝来写本がふたつながらネフスキ伝の直前に置かれていたという事情もあって、この説の支持者はいまなお少くない。たとえば、M. スペランスキはすでにその文学史のなかでロパリョフの説を批判しつつ、ネフスキ伝序文説を主張しているし、<sup>22)</sup> リガ本の刊行者マルイシェフは「滅亡の物語」とネフスキ伝のあいだには同一の作品とみなすことをさまたげるようないちじるしい相違は全くなく、「滅亡の物語」の内容はネフスキが負わなければならなかった困難な政治的諸条件を示しており、両者は有機的に結びついていると述べている。<sup>23)</sup> Д. リハチョフ、<sup>24)</sup> D. チジェフスキ、<sup>25)</sup> R. ヤコブソン<sup>26)</sup>らの研究者もネフスキ伝序文説にかたむいている。ここで注意を要するのは A. シュテンダー・ペーテルセンの見解である。彼は1952年に出版された「ロシア文学史」の第1巻で、リハチョフ同様にガリーチ・ヴォルイニ年代記とネフスキ伝の関係には疑問の余地がないとし、「滅亡の物語」は完全には現存しない大規模な詩の断片で、しかもネフスキ伝への序文的な役割を果しており、あたかもガリーチ・ヴォルイニ年代記におけるエムジャンの物語とおなじような位置を占めていると述べている。<sup>27)</sup> しかしそれから二年後に出版された「古代ロシア文学詞華集」ではこの説を捨て、「滅亡の物語」とネフスキ伝の文体および言語における相違は非常にいちじるしいので、<sup>28)</sup> 前者は現存しない叙事詩の断片とみなすべきであるとしている。<sup>29)</sup> このような見解の変化にはのちに述べるソロヴィヨフの論文(1953年)の影響があるのかもしれない。

ロパリョフによって想定された三部作の一部をなすヤロスラフ侯の死についての物語は、すでに述べたように、早くからその存在が疑問視され、大多数の研究者は否定的な態度をとっていたが、ひとり C. ボグスラフスキのみは「滅亡の物語」のプスコフ本の標題にみられる о смерти... の句を重視して、ヤロスラフ伝がかつて実際に存在したことを主張していた。<sup>30)</sup> 1947年に発表されたゴルランの論文(書かれたのは1940年)はこ

22) M. H. Сперанский, *История древней русской литературы*, ч. 2 М. 1921<sup>3</sup>, стр. 10

23) Малышев, *op.cit.* стр. 187

24) Д. С. Лихачев, *История русской литературы*, т. I, М.-Л. 1958, стр. 148 ここで彼は погибель とはネフスキ死後の諸事件を指すと述べている。

25) D. Tschizewskij, *Geschichte der altrussischen Literatur im 11., 12 und 13. Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1948, S. 385

26) R. Jakobson, The Puzzles of the Igor' Tale in the 150th anniversary of its first edition, *Speculum*, 27 (1952), No. 1, p. 60-61

27) A. Stender-Petersen, *Den russiske litteraturs historie*, København, 1952 の独訳 *Geschichte der russischen Literatur*, B. I, München, 1957, S. 147-150

28) これは明らかに前述の Малышев の説と矛盾する。Soloviev も両者の文体の相違を強調している(*ТОДРЛ*, XV, стр. 104)が、Н. В. Водовозов は Малышев とおなじように両者の文体が同一の作者を推定せしめるほどに近いものであると述べている(*История древней русской литературы*, М. 1958, стр. 118 以下)。

29) Stender-Petersen, S. Congrat-Butlar, *Anthology of old Russian Literature*, N. Y. 1954, p. 174

30) С. А. Богуславский の論文は *Известия отделения русского языка и словесности Академии наук*, XV. кн. 3, 1910 に発表されたもの。ここでは Гудзий, *ТОДРЛ*, стр. 536 による。

のボグスラフスキの考えを一層発展させたものである。この論文で彼は16世紀に編まれた「系譜の書」*Степенная книга*のなかのヤロスラフ伝およびいくつかの年代記にみられるヤロスラフの死にかんする記事にもとづいて、その13世紀の原型と思われるものを復元し、「滅亡の物語」をその序文と断定した。「系譜の書」には実さい「滅亡の物語」の初めの部分と非常によく似たルーシの自然讃美をふくむヤロスラフ伝が収められ、その終りに近く、やはり「滅亡の物語」同様異民族の列挙がみられる。<sup>31)</sup> ゴルランによれば、「系譜の書」では若干の敷衍や誇張をのぞいて新しい事実の記入がおこなわれていないのが普通であるから、ヤロスラフ伝は彼の不幸な死後（蒙古の宮廷における毒殺）まもなくその聖列加入を目的として書かれたものにちががなく、編集の都合で序文の一部が伝記の末尾に収められたのであるという。創意に富んだこの論文はセレブリヤンスキ以後最初にあらわれたものであり、40年代以後の最も注目すべき労作である。しかしこのゴルランの主張にたいして、ソロヴィヨフは、(1)侯の死後書かれた聖者伝になぜ *нынешний* という語があるのか、(2)「滅亡の物語」の伝来写本でヤロスラフ伝が欠けている理由が明らかでない、(3)異民族の列挙だけがなぜ「系譜の書」の末尾にあるのか、(4)文体の相違、などの理由をあげ、<sup>32)</sup> グーディはさらにヤロスラフの貧弱な個性は「滅亡の物語」の雄大さ、壮重さにふさわしくないこと、「系譜の書」が13世紀の資料をそのまま取り入れているという説には十分な根拠がないことを指摘して、<sup>33)</sup> ともに反対の立場をとっている。グーディによる最後の指摘はすでにセレブリヤンスキによっても注意され、ヤロスラフ伝は16世紀の成立にかかるものと説かれていたのであるが、最近ではベグーノフがこの聖者伝はチェルニゴフのミハイル侯の伝記の作りかえであると断定している。<sup>34)</sup> ところでソロヴィヨフのあげた第3の理由、異民族の列挙の位置の前後の問題についてはかならずしも研究者の意見が一致しているわけではない。すなわちグーディは「系譜の書」にみられる列挙は「滅亡の物語」のそれと共通の源泉にさかのぼると考えているが、<sup>35)</sup> ソロヴィヨフとベグーノフはこの説をとらず、前者はヤロスラフ伝の列挙は「系譜の書」の序文にあたる「系図」*Родословец* のみを通じて「滅亡の物語」から借用されたものであると説き、<sup>36)</sup> 後者は単に年代的に「系図」における列挙がヤロスラフ伝のそれより早いだけであるとしている。<sup>37)</sup> すなわちベグーノフは16世紀のヤロスラフ伝の作者が直接「滅亡の物語」を参照したという可能性を排除していない。これはモスクワ・ルーシにおいてキーエフ・ルーシの文学作品がどれほど広く読まれていたかという問題と関連してはなはだ興味深い見解である。しかしいずれにしても

31) 「系譜の書」は今日最も研究のおくれているものである。ヤロスラフ伝のテキストは Gorlin, *op. cit.* p. 10, 17, 28-30 参照。

32) Soloviev, *Harvard Slavic studies*, VI, p. 74-75; *ТОДРЛ*, XV, 104-105 ただし(4)の理由は後者ではあげられていない。

33) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII, 539-540 стр. 539-540

34) Бегунов, *ТОДРЛ*, XV, стр. 122. 「系譜の書」の資料の問題は今日なお最も複雑な問題のひとつ。А. Зимин, К изучению источников Степенной книги, *ТОДРЛ*, XIII, стр. 225

35) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII, стр. 539

36) Soloviev, *ТОДРЛ*, XV, стр. 106

37) Бегунов, *op. cit.* стр. 124

「ルーシの地の滅亡の物語」について

「滅亡の物語」をヤロスラフ伝への序文とするゴルランの仮説は今日ほとんど支持者を見出していない。ついであるが彼の仮説がその根底において、「イーゴリ遠征譚」を18世紀の偽作と考え、この作品によって代表されるような文学的伝統がキーエフ・ルーシに存在しなかったという彼の師 A. マゾンの主張と結びついていることは見落すべきではない。

「滅亡の物語」をヤロスラフ伝あるいはネフスキ伝の序文とする説にたいして、特に50年代になってから、これをいずれの聖者伝とも直接的な関係をもたぬ独立した作品の一部とみる傾向がつよまってきた。とりわけソロヴィヨフは雑誌「ビザンチオン」に発表した論文で、この作品を「イーゴリ遠征譚」に比肩するような雄大な叙事詩の美しい断片であると推断し、そこにあふれている愛国的な感情は同時代の他のヨーロッパ諸国のいかなる文学作品にも例を見ないものであることを強調している。この論文ははじめて「滅亡の物語」を一個の文学作品とみとめ、その芸術的・思想的内容を詳細に分析したものであって、劃期的な意義をもっている。またこの論文は最初の完全な外国語訳であるフランス語への全訳をふくんでいる。ソロヴィヨフがこの作品を独立した叙事詩的作品とみなした根拠は、そこにみなぎっている深い詩的な情緒と、ヤロスラフやネフスキの聖者伝と質的に全くことなる完成された技巧である。ソロヴィヨフのこの論文より一年まえにあらわれたチホミーロフの論文、それからややおくれて発表されたグーディ<sup>38)</sup>、ベグーノフらの論文はいずれも「滅亡の物語」を独立した作品とする点で共通している。ベグーノフは特にネフスキ伝の諸写本の伝来経路を追求し、すべての写本の祖型たる最古の写本には「滅亡の物語」がふくまれていなかったと推定している。<sup>39)</sup> シュテンダー・ペーテルセン、Ю. サザノヴァ、<sup>40)</sup> Н. ヴォドヴォゾフ、<sup>41)</sup> И. エリョーミン<sup>42)</sup> らの文学史家もこの説をとっている。しかしこの独立作品説にしたがう場合(私自身にもこの説が最も真実に近いと思われるのであるが)、プスコフの標題にみられる о смерти... をどう解釈するかということが当然問題となる。プスコフ本ではこの о はオメガ ω をもって書かれており、そのすぐ上に短い横棒があつてさらにそれとならんで小さな о が書かれているのであるが、ロバリョフはこれを写字生による о→по へのあやまれる訂正であるとし、これにもとづいて三部作説を提唱したのであった。フィリップはロバリョフの訂正説を否定して、この句が作品の標題の一部をなすと考えた。すなわち彼は「ヤロスラフ大侯死後のルーシの地の滅亡の物語」が完全な題であるとし、そのさいヤロスラフ大侯とはヤロスラフ賢侯(1115—1154)を指すのであると主張した。<sup>43)</sup> これにしたがえば「滅亡」погибель とは11世紀の中頃から13世紀の前半までの約2世紀間の諸事件を指す

38) もっともその文学史における彼の叙述はかなりあいまいであつて、Серебрянский の説を批判するにとどまる(*История*, стр. 188-192)。彼の最近の論文は現在までの諸説の批判的列挙と研究史の概観である。

39) Бегунов, *Автореферат диссертации*, стр. 6-8

40) Ю. Сазанова, *История русской литературы*, т. I. N. Y. 1955, стр. 393-394

41) Водовозов, *op. cit.* стр. 119

42) И. П. Еремич, *Художественная проза киевской Руси XI-XIII веков*, М. 1957, стр. 351-353

43) Soloviev. *ТОДРЛ*, XV, стр. 115による。

ことになり、あまりにも長すぎるし、モノマフ侯以下この期間の諸侯の偉大さへの讚美がすべて無意味なものになってしまう。ソロヴィヨフとグーディはともにロパリョフの訂正説をみとめているが、それならばなぜこの句がここにあるかについては全く説明を加えていない。これは独立作品説にとって「アキレウスのかかと」であり、この説が *communis opinio doctorum* になりうるかいなかはこの句の解明にかかっているように思われる。

以上ながながと、聖者伝と「滅亡の物語」の関係について諸家の説を紹介したが、その理由は、普通、この問題が作品の芸術性の理解と密接に結びついていると考えられており、かつ最も熱心に論じられているためである。

### Ⅲ. 作者と成立年代

「滅亡の物語」の作者およびその成立の年代と場所についても、すでに述べた問題と関連して、いまなおさまざまな意見が対立している。チホミーロフは特にこの問題を扱った論文のなかで、この作品はカルカ河畔でルーシ諸侯が蒙古軍から大敗をこうむってから2年目の1225年に、ヤロスラフが君臨していたノヴゴロドで書かれたものであると主張した。ヤロスラフの従士たる作者はこの未曾有の敗北のなかにルーシの滅亡を直観したというわけである。これと類似の考えはすでにソボレフスキにあらわれているが、ソロヴィヨフとグーディはともに、カルカ河の戦は南ルーシでおこったものであり、作者とされる北ルーシの住人にはその敗北がおそらくただちに全ルーシの滅亡という危機感を生み出すことはなかったであろうとしてこの説に反対している。グーディによると、ルーシの地の滅亡の危機が北部地方において意識されはじめたのは1237年に開始されたバツの東北ルーシ侵入以後のことであり、しかも作品のなかでヤロスラフの兄のユーリィがヴラデーミル侯として言及されていることはシチで彼の戦死（1238年）以前にこの作品が成立したことを示すものである。タタールの名はおそらく現存しない続きの部分で言及されていたはずであるとされる。グーディはまた、その生涯を通じてペレヤスラヴリと最も深い関係をもっていたヤロスラフが同時代の第一の侯にあげられていることから、作者はペレヤスラヴリの住人であったと考えている。<sup>44)</sup> これにたいしてソロヴィヨフは作品におけるヤロスラフの位置をさらに重視し、作品中「ここより…」 *отселе* とあるのはキーエフを中心としての発言であると推定して、ユーリィ侯の死後作者がヤロスラフにしたがってここに滞在した1240年をもって成立の年と主張している。彼はさらに作者がこの年バツのキーエフ襲撃に際会して戦死し、そのため序文以下を完成させることができなかつたのではないかと考えている。<sup>45)</sup> エリョーミンもやはり「滅亡の物語」をユーリィの戦死以後であるとし、新しい大侯ヤロスラフによる彼の盛大な葬儀がこの作品の生まれる直接の動機となったのであらうと述べてい

44) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII, стр. 540-542

45) 1240年にヤロスラフがキーエフにあったということはネフスキイ伝によっているが(試訳Ⅱ参照) Гудзий は異本にしたがってこの史実に疑問を表明している(*ТОДРЛ*, XII, стр. 540)。その後 Soloviev はさらに後者を反駁(*ТОДРЛ*, XV, стр. 99)。この論争の判定は、史料がネフスキイ伝のみに限られているので困難である。

「ルーシの地の滅亡の物語」について

る。<sup>46)</sup> ベグーノフもこの説に近い。<sup>47)</sup>

一方ゴルランのように「滅亡の物語」がヤロスラフ伝への序文と考えるならば、その成立は必然的にこの侯が蒙古宮廷の内紛にからんで毒殺された1246年以後のこととなり、さらにセレブリャンスキ流にネフスキ伝への序文ととるならば、その成立は1263年をさかのぼるはずがない。この点で興味をひくのはリハチョフとヴォドヴォゾフの説である。前者はネフスキ伝のなかには明らかにガリツィヤの文学的伝統がみとめられるという認識にもとづいて、「滅亡の物語」をふくむこの聖者伝の作者は1250年にガリツィヤからネフスキのもとにおもむいた大主教キリールか、あるいはその弟子のひとりではないかと考える。<sup>48)</sup> (ネフスキ伝の末尾にはキリールの目撃した奇蹟が語られている——試訳Ⅱ参照。) 後者は「滅亡の物語」とネフスキ伝は別々の時期に同一の作者によって書かれたものでこの作者の死後写字生が無意識にふたつの作品を結びつけたために伝来写本のような形が成立したと主張する。さらにヴォドヴォゾフはロパリョフの説をひき、「流罪人ダニールの祈願」のなかの *риторь* と *рабь* の2語が同時代の作品のなかにはそれぞれ「滅亡の物語」とネフスキ伝にだけあらわれること、強力な侯権を主張する政治的思想、はなやかな文学的手法、成立の場所の近さ、などをあげてこのダニールこそ「滅亡の物語」およびネフスキ伝の作者でもあるという大胆な仮説を提出している。<sup>49)</sup> しかし「流罪人ダニールの祈願」には対立する2系統の写本があり、その相互関係は未解決のままという事情もあって、彼の説は若干突飛の観がある。<sup>50)</sup>

総じてこの短い断片が書かれた事情についてはさまざまな事情が考えられ、作者と成立年代を厳密に決定することはほとんど不可能であろう。しかし、作品の完全な理解のために——特に「滅亡の物語」のように断片的な作品の場合——その作者の属した身分や思想的な立場などについての探索が不可欠なことはいうまでもない。(作者がガリツィヤ出身者か生粋の北東ルーシ人かそれともノヴゴロド人かということはモスクワ文学の成立にとって非常に大きな問題である。) この面の研究は文学史家のみならず、歴史家にとっても重要な課題である。

#### Ⅳ. 「イーゴリ遠征譚」との関係

「滅亡の物語」が「イーゴリ遠征譚」とごく近い関係に立っていることはすでにロパリョフによって指摘された。彼は *светло светлая...земля Руськая* と *светлое и тресветное солнце* (*Editio Princeps*. стр. 39, Jakobson, 182), от великого Ярослава...и

46) Еремин, *op. cit.* стр. 352

47) Бегунов, *op. cit.* стр. 13

48) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII стр. 533による。

49) Водовозов, *op. cit.* стр. 120-122. この説にたいする反駁として Лихачев, Републики, *ТОДРЛ*, XV, 1958, стр. 500 参照

50) Тихомиров によるとダニールがこの書状を提出したのはネフスキの父のヤロスラフにあててであるとされ („Написание“ Даниила Заточника, *ТОДРЛ*, X, стр. 269), Лихачев もこの説を前提としてその作者の問題を論じているが (Социальные основы стиля „Моления“ Даниила Заточника, *ТОДРЛ*, X, стр. 106-119), М. Скрипиль はこの作品が「イーゴリ遠征譚」より数十年も早いことを主張している („Слово Даниила Заточника“, *ТОДРЛ*, XI, стр. 72-95)

до нынешняго Ярослава и от стараго Владимира до нынешняго Игоря (Е. Р., стр. 5, Як. 6) などのパラレルをあげている。<sup>51)</sup> つづいてグルシェフスキも諸侯やその支配下の諸民族の列挙, нынешний の用い方の共通性に着目して, 「滅亡の物語」は「ザドンシチナ」と同様, 「イーゴリ遠征譚」の模倣であるとさえ述べた。<sup>52)</sup>

しかし「滅亡の物語」の芸術的側面に最も大きな注意を払い, その見地から「イーゴリ遠征譚」との関係性を熱心に追求しているのはソロヴィヨフである。彼は「滅亡の物語」にかんする最近の三つの論文を通じてこの問題をくわしく論じているが, とりわけ最後の論文では内容と表現上の類似点として24の項目をあげている。そのうち特に注目すべきものはつぎのとおりである。(1)ともに *слово* という標題によって規定されていること, ならびに [*слово о ро...*] という音声的同一性, (2)自由なリズムをもつ詩的性格, (3) *Русская земля* にたいするつよい愛着, (4)自然にたいする抒情的感情, (5)侯家の系譜にたいする配慮, (6)歴史と地理についての作者の博識, (7)表現上のもろもろの類似: *о русская земле...*, *еси, абы* をふくむ条件法, 基本的語彙の同一性…。ソロヴィヨフはこれらの類似にもとづいて, 「滅亡の物語」は「イーゴリ遠征譚」の模倣ではないが, うたがいもなく「同一の詩的流派」the same poetic school に属するものであると結論している。<sup>54)</sup> このふたつの作品のうち一方は断片にすぎず, 他方もそれほど長いものではない。同時代の他の同種の作品が知られぬことから, この結論の妥当性はかならずしもすべての研究者によって承認されえないであろうが, グーディがいつもながらの慎重さで, ソロヴィヨフのあげているパラレルが一般的性格しかもたず, したがってふたつの *слово* のあいだに何らかの関係があったと推定することは不可能であると述べている。<sup>55)</sup> ことには賛成できない。「詩的流派」という言葉の定義にもよるであろうが, 南ルーシの作品である「イーゴリ遠征譚」にみられる高い格調と洗練された手法はその本質的特徴を失うことなく, 約半世紀の期間をおいてこの北東ルーシの作品に再現しているとみることができないであろうか。

ソロヴィヨフは最初から「滅亡の物語」が詩作品であることを主張していたが, 最も新しい論文ではこれを40行に分けるころみを示している。彼によると各行は10ないし16の音節からなり不揃いではあるが, これと同様のことは「シッド」やビリーナにもみられ, かならずしもこの作品を詩とみることがをさまたげないという。

しかしソロヴィヨフ自身が述べているように, 「滅亡の物語」を純粹に文学作品とし

51) Ф. М. Головенченко, *Слово о полку Игореве, Историко-литературный и библиографический очерк*, М. 1955, стр. 224

52) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII, стр. 542による。

53) Soloviev, *ТОДРЛ*, XV, стр. 109-113

54) Soloviev, *Harvard Slavic studies*, XI, p. 78-79

55) Гудзий, *ТОДРЛ*, XII, стр. 544. ここで彼は Soloviev の説がこじつけであるとさえ述べている。これにたいして Soloviev は *ТОДРЛ*, XV, стр. 110で反駁している。Лихачев の意見は一般的なものであるが, 問題の本質をよくついているように思われる。「祖国をばあかも壮大な, 生命あるものとして, すべての歴史・文化・自然の総体として感じとる方法はすでに『イーゴリ遠征譚』にみられ, ルーシの地という広大な形象はロシア文学の発展の全過程にあらわれている。『滅亡の物語』も『イーゴリ遠征譚』とおなじ手法をもって書かれている。」(*Национальное самосознание древней Руси*, М.-Л. 1945, стр. 63.)

「ルーシの地の滅亡の物語」について

て評価しようとするころみはようやく端緒についたばかりである。今後は文学史的見地からの研究がますます深められることが予想される。さまざまに解釈され、その実体さえ明瞭に把握しがたい「文体」についての問題が早急に解決されるとは思われないが、ガリーチ・ヴォルィニ年代記や「イーゴリ遠征譚」などのキーエフ時代の文学作品との思想的・言語的關係が次第に解明されていく可能性は充分にある。

このさい、「滅亡の物語」が独立の作品かいなかということは作品の芸術性の根本にかかわる問題ではないと私は思う。よしんばそれがネフスキ侯の聖者伝の序文としての役割をもっていたにせよ、その莊重なひびきのなかにこめられたつよい情熱は決して聖者伝のパトスと矛盾することがないと思われるからである。聖者伝を全く常套的で無味乾燥な文学のジャンルとみることは誤りであろう。それは古代ロシアにおいて最も一般的で、最も多面的なジャンルであったはずである。ある意味でネフスキ伝はキーエフ文学の嫡子であったとさえいえなくもない。もっともゴルラン流に「滅亡の物語」をヤロスラフ伝と結びつけるとなると、事情はことなる。それはキーエフ・ルーシの文学の否定に通ずることはすでに指摘したとおりである。しかしベグーノフらの研究からも予想されるように、「系譜の書」のヤロスラフ伝との関係も次第に明確にされるであろう。アカデミヤ所属のロシア文学研究所は60年代のなかばまでに、他の諸作品とならんで「滅亡の物語」とネフスキ伝のテキストおよびモノグラフを刊行するむね予告しているので、<sup>56)</sup> ほどなくわれわれはソヴェト学界の最新の研究にふれることができるであろう。

---

56) Р. П. Дмитриева, Проект издания памятников древнерусской литературы, *ТОДРЛ* XI, стр. 492. この編者は Бегунов (*Известия АН СССР, Отделение литературы и языка*, т. XIX, вып. 3, стр. 241-242).

## 試 訳 I

## ルーシの地の滅亡の物語

この日本訳はプスコフ本による。参照したテキストはつぎのとおりである。

Н. К. Гудзий, *Хрестоматия по древней русской литературе XI-XVII веков*, М. 1955<sup>6</sup> стр. 155

A. Stender-Petersen, S. Congrat-Butlar, *Anthology*..., p. 175-176 (このテキストは完全ではなく、詩行に分られている)

М. Н. Тихомиров, *Хрестоматия по истории СССР*, т. I, М.-Л. 1949, стр. 141-142

R. Trautmann, *Altrussische Lesebuch* т. I, Leipzig, 1949, S. 120

このほか Пыпин, *op. cit.* стр. 199-200; Ю. Сазанова, *op. cit.* стр. 395-396; Soloviev, *ТОДРЛ*, XV, стр. 88 にも全文の引用がみられるが異同はほとんどない。

リガ本のテキストは、

М. Gorlin, *op. cit.* p. 27-28

В. И. Малышев, *op. cit.* стр. 188

復元テキストは、

М. Gorlin, *op. cit.* p. 23-24 (このうち日本語訳に影響をおよぼす修正については、注1) および7) 参照)

現代語訳はロシア語 И. Еремин, *op. cit.* стр. 253, フランス語 Soloviev, *Byzantion* XXII p. 109-110; 日本語, 田中陽児氏 世界歴史事典 24, 平凡社, 30 ページを参照した。

アラビア数字の注はテキストの異読, ローマ文字の注は地理的・歴史的事実にかんするものである。

## ルーシの地の滅亡の物語

ヤロスラフ大侯の死について。

おお、光みちみち、げにうるわしきルーシの地よ。なれはあなたの美もつ妙なる地なり。妙なるなれのもてるは、数多き湖、おのがじし崇めをうける川と泉、けわしき山山、高き丘、清き森、<sup>1)</sup>妙なる広野、さまざまなる獣たち、数知れぬ鳥ども、大いなる町々、妙なる村々、僧院のぶどうの園、神の聖堂、さらにはおそるべき侯、ほまれある貴族、あまたのすぐれし人士。ルーシの地よ、なべてのものになればみりてり、おお、キリストのまことの正教よ。

1) Лопарев は「しげれる森」と訂正。Еремин, Soloviev, Stender-Petersen もこれにしたがう。また Gorlin はエピテットを組み替え、この節を「…川と泉、聖なる山々、けわしき丘、高き森、清き広野、妙なる獣たち、さまざまなる・数知れぬ鳥ども…」と読む。いずれの説も根拠が薄弱と思われるのでしりぞけた。

「ルーシの地の滅亡の物語」について

ここよりウグル人<sup>2)</sup>まで、およびリヤフ人<sup>3)</sup>まで、<sup>2)</sup>チャフ人<sup>3)</sup>まで、チャフ人よりヤトヴァグ人<sup>4)</sup>まで、<sup>3)</sup>さらにヤトヴァグ人よりリトヴァ人<sup>5)</sup>まで、<sup>4)</sup>ネメツ人<sup>6)</sup>まで、ネメツ人よりコレラ人<sup>7)</sup>まで、コレラ人より異教徒トイマ人<sup>8)</sup>の住むウスチューク<sup>9)</sup>まで、および息づく海<sup>10)</sup>のかなたまで、この海よりボルガル人<sup>11)</sup>まで、ボルガル人よりブルタス人<sup>12)</sup>まで、ブルタス人よりチェルミス人<sup>13)</sup>まで、チェルミス人よりモルドヴァ人<sup>14)</sup>まで、すべてこれら異教の国々は、神のみ心もてキリスト教徒に服したり。フセーヴォロト大侯<sup>15)</sup>に、その父キーエフ侯ユーリィ<sup>16)</sup>に、その祖父ヴラデーミル・モノマフ<sup>17)</sup>に。ポーロヴェツ人<sup>18)</sup>はモノマフ来たとおどして<sup>19)</sup>おのが子をゆりかごに寝せ、リトヴァ人は沼より外にあらわれず、ウグル人は大いなるヴラデーミルの攻め登るをおそれて、石の砦<sup>20)</sup>を鉄の門もて固めたり。しかしてネメツ人は青き海のはるかかなたにあるを喜べり。ブルタス人、チェレミス人、ヴァーダ人、<sup>8)</sup>モルドヴァ人はヴラデーミル大侯のために蜂蜜を集め、ツァーリグラト<sup>21)</sup>のマヌエル帝<sup>22)</sup>は、ヴラデーミル大侯におのが都をうばわれんことをおそれ、大いなる貢を彼におくりたり。

さて、かの時代にはキリスト教徒にわざわいありき。大いなるヤロスラフよりヴラデーミルまで、<sup>23)</sup>いまのヤロスラフ<sup>24)</sup>まで、その兄ヴラデーミル侯ユーリィ<sup>25)</sup>まで…

2) Stender-Petersen はここに「リヤフ人より」 **отъ Ляховъ** を挿入

3) 「ここより…」以下ここまで Soloviev による修正では「ウグル人よりチャフ人まで、チャフ人よりリヤフ人まで、リヤフ人よりヤトヴァグ人まで」

4) Soloviev の仏訳はここに「リトヴァ人より」を挿入

5) プスコフ本、リガ本ともに **ношаху**。これは **Лопарев** によって **полошаху** あるいは **страшаху** の誤りと指摘さる。Тихомиров をのぞき **ношаху** はとられていない。

6) Soloviev の修正では「石の山々」

7) Gorlin の復元テキストでは「およびヴラデーミルより」に修正。

a) ハンガリヤ人

b) ポーランド人

c) チェク人

d) ブーク・ネマン両河間のリトアニア系民族

e) リトアニア人

f) 普通にはドイツ人を指すが、ここではスウェーデン人ともされる。

g) ネヴァ河、ラドガ・オネガ湖周辺に住んだフィノ・ウグル系の人種

h) 北ドヴィナの支流トイマ河畔に住んだフィノ・ウグル系の人種

i) 北ドヴィナ河畔の都市

j) 北氷洋あるいは白海

k) いわゆるヴォルガ・ブルガール人

l) ヴォルガ・ブルガールとハザール汗国のあいだに住んだフィノ・ウグル系の人種

m) ヴォルガの西の民族

n) やはりヴォルガ西岸のフィノ・ウグル系の民族

o) いわゆるポリシヨイ・クネズド。ヴラデーミル・スーズダリの侯（在位1176-1212）

p) フセーヴォロトの父。キーエフ、ロストフ、スーズダリに君臨（在位1132-1157）

q) ユーリィの父。キーエフ大侯（在位1093-1125）

r) 南ロシアの草原を遊牧していたトルコ系の民族

s) 北東ルーシのヴァトカ流域に住んだフィノ・ウグル系と推定される民族。ネヴァの南に住んだ **Водь** 人（Гудзий）、ヴォルガ右岸のモルドヴァの一支族（Soloviev）とする説あり。

t) コンスタンチノポリス

u) コムネーノス王朝第三代の皇帝（在位1143-1180）。この部分は明白なアナクロニズム

v) フセーヴォロトの第三子、ネフスキイの父で、ペレヤスラヴリ、ノヴゴロドの侯（1191-1246）

w) フセーヴォロトの第二子、ヴラデーミル・スーズダリの侯（在位1211-1238）

## 試 訳 Ⅱ

## アレクサンドル・ネフスキイ侯一代記

以下の日本訳のために最も代表的なつぎの諸校本を参照した。

1. А. Н. Насонов, *Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*, АН СССР, М. Л. 1950, стр. 289-306, 6748年~6759年 (引用は НПЛ)
2. А. Н. Насонов. *Псковские летописи*, вып. 2, АН СССР, М. 1955, сср. 11-16 (ПЛ)
3. В. И. Малышев, *op. cit.* стр. 188-193 (РГ)
4. Н. К. Гудзий, *Хрестоматия*...стр. 156-162 (Гд)
- A. Stender-Petersen, *Anthology*...р. 100-106 (SP)
- R. Trautmann, *op. cit.* 120-127 (Tr) — 抜萃

現代語訳としてロシア語 Еремин, *op. cit.* стр. 257-263 (Er), ドイツ語 W. Fritze, *Russische Heiligenlegenden*, Zürich, 1953, S. 255-265 (Fr).

なお4のテキストはすべて В. Мансикка, *Житие Александра Невского. Разбор редакций и текст* (Памятник древней письменности и искусства, CLXXX, СПб, 1913) によるところが大きい。

底本にしたのは最も完全な4のグループに属するもので、段落は便宜上 SP にしたかった。しかし SP における大段落と小段落の区別（前者は行あけ、後者は行かえで示される）および詩になぞらえた区切り方はこれを無視した。〔 〕は SP における復元を示す。

アラビア数字の注はテキストの異読にかんするもの、ローマ文字の注は歴史的事実にかんするものである。なお前者においては特別の指定がないかぎり異読は句読点のまえにさかのぼらない。

アレクサンドル・ネフスキイ侯一代記<sup>1)</sup>

6771年<sup>2)</sup>11月23日アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯が没した。<sup>2)</sup>

彼の人となりと生涯を語ろう。<sup>3)</sup>われらの主、神の子イエス・キリスト<sup>4)</sup>の御名において、心まずしく、罪ふかくして、いやしむべき<sup>5)</sup>われもまた、<sup>6)</sup>フセーヴォロトの

- 1) コノ標題ハ НПЛ, ПЛ ニナシ
- 2) コノ節ハ НПЛ, ПЛ, SP ニナシ. Гд, Tr ニヨル
- 3) コノ節ハ РГ ニナシ
- 4) コノ語ハ РГ ニナシ (以下 РГ ハニ脱落ノ節・語多シ)
- 5) НПЛ, ПЛ: 思慮あさき
- 6) Tr: われは
- a) ロシヤ宇宙開闢紀元. 西暦 1263年に当る. なおこれは実さいにはアレクサンドルの死んだ日ではなく、葬られた日である

「ルーシの地の滅亡の物語」について

孫アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯<sup>7)</sup>の生涯をしるさんとしている。これは、われがおのが父祖より物語を聞き、みずから彼の成年期の目撃者であるためであって、名誉にとみ栄光にあふれたそのとおき生涯を喜んで物語ろうと思うのであるが、箴言の作者の述べたごとく、「よこしまなる心に智恵入ることなし。そは高きところにあり、ちまたのなかに立ち、つよき門のかたわらに坐しおるゆえなり。」<sup>8)</sup>われはおろかなるものにせよ、とおとき聖母の祈りと、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ聖侯の助けによって、はじめることにしよう。

このアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯は、神のみ心により、<sup>8)</sup>敬けんにして慈悲ふかくしかも柔和なる父ヤロスラフ大侯<sup>9)</sup>と、敬けんなる母フェオドーシヤより生まれた。予言者イザヤが述べたごとく、「主はかく言いたもう。われは侯を立つ、彼らはきよめられたるものなればなり。われはまことへと彼らを見ちびかん。」<sup>9)</sup><sup>10)</sup>神の命なくしてアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯の君臨はなく、彼の君臨は神によって祝福されていたからである。

彼の身の丈<sup>10)</sup>は人並すぐれ、その声は人びとのなかにあってラッパのごとく、その顔はエジプトの王がエジプトの副王にすえたヨセフの顔のごとくであった。彼はサムソンの力を分けもち、ソロモンの智恵をそなえていた。神は彼に、ネロ帝の子にして、ユダヤの地を征服したローマ皇帝ヴェスパシアヌスの勇敢さをあたえた。かつてヴェスパシアヌスはヨタパタに近づかんとして戦い、その市民たちが出撃して彼の軍をやぶると、ただひとり取りのこされたが、彼らを城門まで追いかえして、おのれの親兵隊をあざけり、彼らをなじっていった。

「汝らは予をただひとり置きざりにした。」

アレクサンドル・ヤロスラヴィチもこのように常に勝ち、やぶれることがなかった<sup>11)</sup>さて<sup>12)</sup>西の国から「神のしもべ」と名のるやからのひとり<sup>13)</sup><sup>e)</sup>が彼のおどろくべき容姿を見ようとしてやってきた。あたかもいにしえに、南の国の女王がその智恵を聞かんとしてソロモンをおとずれたごとく、アンドレアスと名のるこの者も、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯を見、おのが国に戻って言った。

「予はもろもろの国、もろもろの民のあいだを経めぐったが、諸王のなかにかかる王を、諸侯のなかにかかる侯を見たことがなかった。」

するとローマ領域の北国の王<sup>f)</sup>がアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯のかかる人とな

7) НПЛ: ヤロスラフの子にしてフセーヴオロトの孫なるアレクサンドル聖侯

8) ПЛ: ニナシ

9) НПЛ, ПЛ, Ер: 「…われは〔彼らを玉座へと——Ер〕みちびかん。」まことに…; Гд: 「…われはみちびかん。まことに…」

10) ПЛ: 眼光

11) SP: ハ〔6ъ〕挿入; НПЛ: ハ保存

12) ПЛ: さてこのため

13) ПЛ: ……力つよきひとり

b) 箴言 8: 2-3 か

c) キーエフ大侯およびヴラヂーミル・スーズダリ侯 (1238-46)

d) イザヤ書か。箴言 8: 15-16 参照

e) リヴオニヤの聖十字架ドイツ騎士団の頭目 Andreas Welwen

f) スウェーデン王 Erik (1250 年没)。しかし実際に遠征してきたのは彼の摂政 Birger Jarl。ローマ領域とはカトリック圏のこと。

りを聞いて、いった。<sup>14)</sup>

「行って、アレクサンドルの地を征服しよう。」

そして大軍をあつめ、<sup>15)</sup> 多くの船をおのが軍勢でみだし、闘志にもえ、大挙して出陣し、無智によろめきつつネヴァ河<sup>16)</sup>を越えた。<sup>16)</sup> 彼はおごりたかぶって、大ノヴゴロドなるアレクサンドル・ヤロスラヴィチに使者をおくって、いった。

「汝は予に刃向うるか。予はすでにここに来た。そして汝の地を征服するであろう。」

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯はこのことばを聞いて、はげしく心をもやし、聖ソフィヤの寺院に入って、祭壇のまえにひざまづき、涙とともに神に祈りはじめて、いった。「ほめたとうべき正しき神よ、つよき大いなる神よ。天と地と、海と川とをつくりたもうたとこしえなる神よ。汝はもろもろの民のために境界をもうけ、他人の土地をおかすことなく住むように命じたもうた。」

そして彼は詩篇の歌を思いおこして、いった。

「主よ、わが争いをさばきたまえ。われをはずかしめる者をさばきたまえ。われと戦うものをおさえたまえ。武器と楯をとりて、わが助けに立ち出でたまえ。」<sup>17)</sup>

そして祈りをおえて立ち上がり、大主教に敬礼した。大主教スピリドンは祝福して、彼を去らせた。アレクサンドル・ヤロスラヴィチは涙をぬぐいつつ教会を出て、おのが親兵隊をあつめはじめた。そしていった。

「神は力のなかならず、まことのなかにおわすのだ。詩篇の作者ダビデを思いおこそう。『このやからは武具に身をかため、馬にまたがりたり。われらは主なる神の名を呼ばん。彼らは打ちくだかれ、たおれ伏しぬ』」<sup>17)1)</sup>

そしておのが軍勢の多くを待たずして、聖なる三位一体をたのみつつ、わずかの親兵隊をひきいて彼らにむかって出陣した。

聞くもいたましきことには、彼の父、誠実にして大いなるヤロスラフはおのがいとし子アレクサンドル・ヤロスラヴィチ<sup>18)</sup>にふりかかったかかる事変を知らず、アレクサンドルもキーエフなる<sup>19)</sup>父に知らせをおくるいとまがなかった。すでに敵軍がせまり、また大侯が出陣をいそいだために、多くのノヴゴロド人があつまらなかった〔ためである〕。<sup>19)</sup>

そして彼は日曜<sup>20)</sup>に敵と遭遇した。<sup>20)</sup> それはカルケドンでおこなわれた宗教会議<sup>1)</sup>の

14) ПЛ: 心のなかで考えた

15) НПЛ: 侯たちと司教たちムルマン、スム、エムを連れ、多くの……

16) НПЛ: ラドガ、ノヴゴロドおよびすべてのノヴゴロドの地域を取らんとして

17) ПЛ: 「……われらは立ち上がりたり。」; Ep: 「……われらは立ち上がり、いままっすぐに立つ。」

18) Tr: ……大侯

19) ПЛ ハ 60 ヲ保存

20) ПЛ ニコノ節ナジ。代リニ 7月15日に。

g) ラドガ湖からバルト海にそそぐ河。この河畔での勝利がアレクサンドルにネフスキの名をあたえた。

h) 詩篇か。35:1-2 参照。Fr は 79, 35:1-2; 43:1 を指摘

i) Fr によると詩篇 20:8-9

j) ヤロスラフは実際にはこのときヴラヂーミルにいたとする説あり (Гл)。

k) 1240年7月15日

l) 第四回宗教会議 (451年)

「ルーシの地の滅亡の物語」について

630 人の教父の命日であり、聖キリロスとユリタ<sup>m)</sup>の、またルーシの地に洗礼をさずけたヴラデーミル聖侯の命日であった。

侯は聖なる受難者ボリースとグレーブを深く信仰していた。

イジョラの地<sup>n)</sup>の頭目で、名をペグルシ<sup>21) o)</sup>という者がいた。早朝の<sup>22)</sup>海の見張りがこの者にゆだねられていた。彼はとおとき洗礼を受け、なお異教を信ずるおのが氏族のなかに住んでいた。とおとき洗礼のさいフィリップという名が彼にあたえられた。そして神の教えにしたがって生活し、水曜と金曜には断食をおこなっていた。そこで神はおそろしきまぼろしを目にすることを彼にゆるされた。<sup>23)</sup>手みじかに語ろう。<sup>24)</sup>

彼はアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯にむかってすすんでいく軍勢をみた。ヴァリャークの兵力とその陣立てを侯につたえるため、<sup>25)</sup>その進路を見張りつつ、彼は夜もすがら目ざめていた。太陽がのぼりはじめたとき、彼は海の上に大きな物音を聞いた。見ると海の上を一そうの舟が漕ぎすすみ、舟の中央には真紅の衣をまとったボリースとグレーブが立ち、たがいの肩に手をかけていた。漕ぎ手たちはあたかも狭霧を着ているかのように坐っていた。ボリースがグレーブにいった。

「弟グレーブよ。<sup>26)</sup>漕がしめよ、われらの血つづきのアレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯を助けんために。」

ペグルシはかかるまぼろしを見、ふたりの聖なる受難者のかかる声を聞いて、身をおのかせつつ立っていた。やがて舟は見えなくなった。

そしてまもなくアレクサンドル・ヤロスラヴィチが到着した。ペグルシは喜んで彼をむかえ、大侯のみにまぼろしのことを語った。すると侯はいった。

「だれにもそれを語るな。」

侯は昼の第六時に敵を急襲した。ローマ人とのあいだに大いなる戦がおこった。侯は無数の敵をたおし、おのれのすどい槍で王自身の顔にきずをあたえた。

<sup>27)</sup>このときアレクサンドルの軍勢のなかに、六人のつよい勇士があらわれ、侯とともにげしく勇敢に戦った。

第一はアレクシチなるガヴリーロ。彼は小舟をおそい、両わきをかかえられて走る王子<sup>28)</sup>を見ると、敵がのぼって舟に入った板の上を馬で乗り入れ、王自身<sup>29)</sup>にせまった。敵は彼のまえから逃げ散った。しかしふたたびとって返すと、彼を馬もろとも板の上から海のなかに突きおとした。彼は神のご加護によって海から無傷ではい上がり、またし

21) SP, Пеглуси; НПЛ, Пелгусни; ПЛ, Пелоггии; Гд, Беглусичь……

22) НПЛ, Tr = ナシ; ПЛ: 夜の

23) ПЛ, Tr: この日に

24) Гд: 彼らの力を手みじかに語ろう

25) ПЛ: 海辺に立ちて、その……

26) НПЛ: 速く

27) ПЛ = ハ以下, ……すべてのしかばねがそこにあつたのである マデ脱落

28) Ep: ……王

29) Ep: 舟まで (Fr モ)

m) Cyrilos と Julitta, 4 世紀の聖人

n) ネヴァ河の南流域

o) SP によるとフィン族の姓 Pelkonen あるいは Pelkoinen のなまり

でも馬に乗って、敵軍のさなかで相手の司令官とはげしく戦った。<sup>30)</sup>

つぎはズブイスラフ・ヤクノヴィチなるノヴゴロド人。彼は幾たびも敵をおそい、心にすこしも恐れをいだかず、斧ひとつで戦った。彼の斧のために幾人もがたおれた。アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯<sup>31)</sup>は彼の力とその勇敢さに驚嘆した。

第三はポーロツク人で侯の狩番たりしヤコフ。彼は刀をふるって敵軍に攻め入り、いさましく戦った。侯は彼をたたえた。

第四はミーシャ<sup>32)</sup>なるノヴゴロド人。彼はおのれの親兵隊とかちですすみ、ローマ人の船を三隻沈めた。

第五は侯の小姓のひとりサヴァ。彼は黄金の頂きもつ敵王の大天幕をおそい天幕の柱を切りたおした。アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯の軍勢は天幕のたおれるのを見て大いに喜んだ。

第六は侯の従僕のひとりラトミール。彼はかちであったが<sup>33)</sup>大ぜいの敵にかこまれ、多くの傷を受けてたおれ、息絶えた。

われはすべてこれらのことを、わが主アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯およびこのときこの戦に加わった他の者たちから聞いたのである。

このときおどろくべき奇蹟がおこった。かつてエゼキエル王のさい、アッシリア王セナケリブが聖なる都を征服せんとしてエルサレムに押し寄せたとき、突然主の御使いがあらわれ、アッシリアの軍勢のうち18万6千人<sup>34)</sup>を打ちたおした。彼らは朝になって立ち上がり、多くのしかばねを見たのである。アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯がイジョラ河<sup>35)</sup>のむこう岸で王を打ちやぶって勝利をおさめたときも同様であった。そこをアレクサンドルの軍勢は通過することができなかった。神の首天使のためにたおされたすべてのしかばねがそこにあったのである。残った者どもは逃げ去った。しかばねは船になげこまれ海に沈められた。<sup>35)</sup>

<sup>36)</sup>アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯は勝利とともに帰還した。神を讃美し、おのが造り主、父と子と聖霊をいまより未来永劫とこしえにたたえつつ、

アーメン。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯の凱旋後第二年目に<sup>37)</sup>西の国から敵がやってきて、アレクサンドルの国に町をきずいた。アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯はたちまち彼らをおそい、その町を攻めほろぼし、ある者は殺し、ある者はおのれとともに連れ帰り、またある者はあわれんで放してやった。彼はこの上なく情けぶかかったからである。

30) НПЛ: 彼らの司令官スピリドンはここで殺された。彼らの主教もおなじ場所で殺された。

31) Tr: ニナシ

32) Tr: Мѣша

33) НПЛ, Tr: 彼はかちで戦い

34) НПЛ: 100 и 80 и 5000 (18万5千人。いざや書37:36)

35) НПЛ: 以下 他の者のためには穴を掘り、そのなかに数知れず投げこんだ。ほかにくさった者も多かった。ノヴゴロド人もまたここでたおれた……(以下戦死シタのうごろど人ノ名ヲ列挙)

36) НПЛ: 以下……勝利をおさめてから第三年目の冬 マデナシ

37) ПЛ: ……ふたたび……

p) ネヴァ河の一支流

「ルーシの地の滅亡の物語」について

アレクサンドルが王をやぶって勝利をおさめてから第三年目の冬、<sup>38)</sup> 彼は大軍をひきいてネメツの地を攻めた。これは彼らが「スラヴの地をはずかしめよう」<sup>39)</sup> といって、たかぶらぬようにするためであった。

敵はすでにプスコフの町を取り、<sup>40)</sup> そこに代官が置かれていたのである。<sup>41)</sup> アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯はその代官たちをとらえ、<sup>41)</sup> プスコフの町を解放し、敵の地を征服して焼きはらい、無数の捕虜をとらえ、ある者は切り殺した。他の者<sup>42)</sup>は町にあつまっていた。

「アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯を打ちまかし、生けどりにしよう。」

敵軍が近づいたとき、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯の見張りはこれを知った。アレクサンドル侯は兵をあつめ、敵にたいして出撃した。彼らはチュード湖についた。両軍の数は多数であった。彼の父ヤロスラフは彼を助けるため、弟のアンドレイ侯を多くの親兵とともに送った。かくてアレクサンドル侯のもとには、いにしえのダビデ王のもとと同様に多くの勇敢な戦士たちがいた。アレクサンドルの戦士たちはまた不屈で、勇敢であった。彼らは闘志にみちあふれていた。彼らの心は獅子の心のようにであった。彼らはいった。

「われがしたう<sup>43)</sup> 栄ある侯よ。いまこそ汝のためにわれらのこうべを横たえるべきときがきた。」

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯はもろ手を天にさしのべて、いった。

「主よ、わが争いをさばきたまえ。高言してはばからぬ民よりわれをすくいたまえ。主よ、われを助けたまえ。かつてアマレキトにたいしてモーゼを助け、呪われたスヴァトポルクを攻めたわが曾祖父ヤロスラフ<sup>44)</sup>を助けたごとく。」

それは土曜日<sup>45)</sup>であった。太陽ののぼるころ、両軍が衝突した。はげしい戦がおこり、槍のふれ合うひびき、くだける音、切りむすぶ剣のひびきは凍った湖をゆるがすばかりであった。そして氷は見え、一面血でおおわれた。われはこれを目撃者から聞いたのである。彼らはいった。

「われらはアレクサンドル・ヤロスラヴィチを助けるために神の軍勢が宙天にあらわれるのを見た。しかして彼は神の助けをもって、<sup>44)</sup> 敵をやぶり、彼らはきびすを返した。味方は宙を行くごとく追いかけて敵を切りころした。<sup>45)</sup> 敵には逃げるべきところがなかった。ここで神は全軍のまえでアレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯の名を高から

38) НПЛ デハ以下……ローマにいたるまで 6750年ノ項

39) SP, Урокомъ……себе 意味不明。コノ訳ハ Гд, Ер ニヨル

40) SP, [быша] ヲ挿入

41) ПЛ: 神を知らぬネメツ人から……

42) ПЛ: 心おごれる者たち

43) ПЛ ニナシ

44) НПЛ: 聖ソフィヤと、かつて血を流した聖なる受難者ボリースとグレーブの助けをもって

45) НПЛ デハココニ戦闘ノ場所、タオレタどいつ人ノ数が入ル

q) プスコフはドイツ騎士団によって1240年あるいは1241年に占領された。

r) ヤロスラフ賢侯(1019-1054)。彼はみずからの弟ボリースとグレーブをころした兄スヴァトポルクをたおして侯位についた(福岡星児氏 ボリースとグレーブの物語「スラヴ研究」3, 101-124参照)

s) 1242年4月5日

しめたもうたのである。あたかもエリホンにおいてヨシュアの名を高からしめたごとく、『アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯を生けどりにしよう』といった者どもを、神は彼の手にあたえたもうたのである。<sup>46)</sup>

レかして戦において彼に刃向うものはひとりもなかった。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯は大いなる栄光とともに凱旋した。彼の軍勢のなかにはきわめて多くの捕虜がいた。馬のわきには騎士と呼ばれる者たちがひかれてきた。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯がプスコフの町に近づくと、祭服をつけた修道僧と僧侶たち、および多くの人びとが神をたたえ、主君アレクサンドル大侯にほめ歌をささげつつ、十字架をもって町のまえに出むかえた。

「主よ、汝は柔和なるダビデが異邦人を打ちまかすのを助けたもうたが、こんどはわれらの正しきアレクサンドル侯が十字架の武器もて異邦人を打ちやぶり、アレクサンドルの手もてプスコフの町を解放するのを助けたもうた。」

〔そしてアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯はいった。〕<sup>47)</sup>

「おお、おろかなるプスコフ人よ。汝らがもしアレクサンドルの子孫にいたるまで、彼を<sup>48)</sup>忘れることがあるならば、かつてエジプトの俘囚からみずからを解き放したもうた神と、すべてのことを忘れ、荒野においてマンナと焼きうずらで飢えをしのいだユダヤ人<sup>49)</sup>のごとくなるであろう。」

すべての国々にアレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯の名がひびきはじめた——ペーシの海<sup>50)</sup>まで、アラビヤの山々まで、ヴァリャーグの〔海の〕国まで、<sup>51)</sup>そしてローマにいたるまで。

<sup>52)</sup>このころリトヴァの民がふえた。そしてアレクサンドルの領土で人びとをおそって殺し、<sup>53)</sup>悪事をはたらきはじめた。そこで彼はあるとき出撃し、敵の七部隊を打ちやぶり、多くの侯や司令官を殺した。ある者は生けどりにし、彼をののしった者たちを馬の尾にゆわえつけた。<sup>54)</sup>人びとは彼の名をおそれはじめた。

このころ、東の国にさるつよい王があらわれた。そして神は彼に東から西にいたる多くの国々をしたがえさせた。<sup>55)</sup>王はアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯の勇敢さと名声を聞いて、彼に使者をおくって、いった。

「アレクサンドルよ。汝は神が予に多くの国々を服従せしめたことを知らぬか。汝だけが予の力にしたがうことをのぞまぬのか。もしおのれの地を取られたくないならば、

46) Гд, Ер ハコノ引用ヲ「……あらわれるのを見た」マデニトドメル

47) НПЛ, Гд, Ер ニナシ。以下ハ作者ノ呼ビ掛ケ; ПЛ: そしてアレクサンドルは言った

48) Гд: アレクサンドル侯とノヴゴロドの戦士たちを

49) НПЛ, ПЛ, Гд: 主がやしないたもうたユダヤ人

50) ПЛ: ホヌージ; Гд: エジプトの海; Ер: ポント海

51) Гд, Ер: ヴァリャーグの海の両岸から

52) НПЛ ニハ以下……多くの国々をしたがえさせた マデナシ

53) Гд, Ер デハコノ句ツギノ節ニツク (アレクサンドルは) 出撃して彼らをころしはじめた

54) ПЛ, Гд, Ер: 彼の従者たちはののしりつつ、彼らを馬の尾にゆわえつけた。

55) НПЛ デハ以下……彼を退出せしめた マデ 6754 年ノ項

「ルーシの地の滅亡の物語」について

ただちに予のもとに来たれ、汝は子の王国の栄光を見るであろう。」

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯は、父の死後、<sup>56)</sup>大軍をひきいてヴラヂーミルにおもむいた。彼の到着はおそろしいものであった。この知らせはヴォルガの河口に達した。そしてモアビト<sup>57)</sup>の女たちは「アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯がくる」といって子供をおどかしはじめた。

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯は、相談のすえ<sup>58)</sup>——そして主教キリールの祝福をうけてから——王のもとに行った。<sup>59)</sup>バツ王は彼を見ておどろき、おのが貴族たちに行った。

「予の聞いたことは真実であった。彼の国には彼のごとき侯はいない。」

そして、大いなる名誉<sup>57)</sup>とともに彼を退出せしめた。

そののち<sup>58)</sup>バツ王は彼の弟アンドレイにたいして立腹し、彼にたいしておのれの司令官ネヴリイを送った。彼はスーズダリの地を荒した。ネヴリイがとらえられてのち、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯は教会を建て、町をみだし、逃げ散った人びとをその家々に連れ戻した。

かかる者について予言者イザヤはいった。

「国々のよき侯とは、静かで、<sup>59)</sup>愛想よく、おだやかで、つつましく、神の姿に似たるものにて、富を追わず、正しき者の血を軽んぜず、<sup>60)</sup>みなし子と寡婦を真実にしたがってさばき、情けふかく、おのれの下僕にも他人の下僕にも親切で、〔異〕国からきたる者をこころよくもてなす者なり。<sup>61)</sup>神は天使を愛し、人間にたいしてめぐみをたれ、全世界にその情けを示したもうゆえなり。」<sup>62)</sup>w)

かくて神は彼の地を富と栄光もてひろげられ、彼によわいをめぐまれた。<sup>63)</sup>

あるとき大ローマの教皇<sup>x)</sup>からの使者がきて、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯にいった。

「教皇はつぎのようにいった。『われらは汝が心正しきすぐれた侯であり、汝の地が

56) НПЛ: 大いなる智慧をもって考え、ただちに主教キリールのもとにおもむき、おのれの言葉を述べた。「父よ、予は汗国の王のもとにおもむかんとす。」; Ep: 親兵隊と相談して

57) НПЛ: 大いなる愛とともに

58) НПЛ: デハ以下2箇所ノ脱落ヲノゾキ最後マデ 6759 年ノ項

59) Гд, техъ

60) Гд: 正しき者の血を見ず; Ep: ニナシ

61) ПЛ: かかる者を神は守りたもう。神は天使を……

62) Гд: ……真実にしたがってさばき、おのが下僕にも、異国より来たれる者にも親切で、みなし子をやしない、神に祈り、天使を愛し、(天使を愛さず——SP, 訳ハ Гд =ヨル) 人にはめぐみをたれ、全世界におのが情けを示す; Ep: = 情けふかく 以下ナシ

63) Гд, Ep: デハココマデ聖書ヨリノ引用

t) ヤロスラフは 1246 年 9 月 30 日に蒙古宮廷の内紛にからんで毒殺された。

u) SP によるとヴラヂーミル・スーズダリ侯国の近くに住んでいたフィン系種族。Ep は旧約聖書にあらわれる種族ととり、ここでは蒙古人を意味すると考える。

v) 1252 年のこと。このとき彼はヴラヂーミル・スーズダリの侯領を安堵され、大侯の称号をみとめられた。実際にはこれ以前にも幾度か彼は汗の宮廷に伺候している。

w) イザヤ書か。1:17 と 32, エレミヤ書 23:5 参照。

x) インノケンチウスIVが 1252 年におくった使者。1242 年以来教皇はアレクサンドルにカトリック改宗をすすめる、蒙古にたいする軍事的同盟を提案してしばしば使者を派遣した。

栄えており大いなることを聞いた。このゆえに予は12人の枢機郷のうち、最もかしこきふたり<sup>64)</sup>を汝のもとに送った。汝は彼らの教えを聞くであろう。』と」

アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯はおのれの賢者たちと相談したのち、彼らにむかって叫んでいった。

「アダムから大洪水、もろもろの民の離散、アブラハムの初めにいたるまで、アブラハムからイスラエル人のチェルム海通過まで、イスラエルの子らのエジプト出国からダビデ王の死まで、ソロモンの治世の初めからアウグストゥス、キリストの誕生、受難とよみがえりまで、よみがえりと昇天からコンスタンチヌスの治世まで、第一回の宗教会議から第七回まで<sup>65)</sup>——予はこれらすべてをよく知っている。」

そしていった。<sup>66)</sup>

「われらは汝らから教えを受けぬ。」

彼らはおのが国に帰った。

<sup>67)</sup>アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯のよわいが<sup>68)</sup>ました。<sup>69)</sup>彼は聖職者と修道僧を愛し、造り主自身をあがめるように、府主教と主教らをあがめた。

そのころ異教徒のために大いなる災いがあった——彼らは人びとにおのれらとともに戦に出かけることを命じたのである。<sup>70)</sup>アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯は人びとをこの不幸からすくうことを乞わんため、王のもとにおもむいた。そして弟ヤロスラフと息子ドミトリイをノヴゴロド人とともに西の国々におくり、おのが軍勢<sup>71)</sup>をもすべて彼らとともに出発させた。ヤロスラフはおのれの息子たち<sup>72)</sup>とともに<sup>73)</sup>大軍をひきいて出陣し、ネメエツの町ユーリュフ<sup>aa)</sup>をとり、多くの捕虜をとらない、大いなる名誉<sup>72)</sup>とともに帰還した。アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯は異邦人のもとからネージニイ・ノヴゴロドに到着し、数日のあいだそこにつつがなくとどまった。しかしノヴゴロド<sup>73)</sup>に到着するとわずらいはじめた。

お悲しきかな、汝、あわれなる者よ。汝はいかにしておのが主君の最期を書くことができよう。いかにして汝のまなこは涙とともに閉じずにいられよう。その胸はにがき

64) НПЛ: ……ふたり, Галдь と Гемонть; ПЛ, Ер: Агалдаль と Гъмонть; Гд: Гаадаль と Гемондаль……

65) ПЛ: コンスタンチヌスの治世の初めから第一および第七宗教会議まで

66) Гд: =ナシ

67) НПЛ: =以下……わずらいはじめた マデナシ

68) ПЛ: 大いなる栄光のうちに……

69) Ер: 神はアレクサンドル・ヤロスラヴィチ侯の日々を祝福したもうた

70) ПЛ: ……そして「予自身につかえるごとく、全力をつくして予の息子らにつよえよ」と言って、おのれの従僕たちを

71) ПЛ: ドミトリイ侯は

72) ПЛ: 大いなる戦利品

73) ПЛ, Гд: ゴロデーツ; Ер: ゴロドク

y) ロシヤの諸侯は当時キプチャク汗国に一定数の軍隊を提供する義務を負わされていた。1262年アレクサンドルはこの制度の廃止を要請するため汗のもとにおもむいた。

z) 実際は甥たち。古代ロシヤ特有の呼び方。

aa) ヤロスラフ賢侯によって建設されたエストニヤの町デルプト。実さいにはヤロスラフとドミトリイの連合軍はこの町を占領できなかった。

「ルーシの地の滅亡の物語」について

悲しみのゆえに、いかなればはりさげずにいられよう。ひとは父親を忘れることはできる。しかしよき主君を忘れることはできぬ。あたかも主君とともに生きながら棺に入ったごとく。

74) アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大侯はひたすらにおのが主なる神をあこがれ、地上の王国を去り、天の王国をのぞみつつ、修道僧の天使の聖像を受けた。<sup>bb)</sup>なお神は彼がより大いなる位、スヒーマ<sup>cc)</sup>を受けることをゆるしたもうた。かくて彼はやすらかにおのが魂を主にゆだねた。彼は聖使徒ピリポの命日 11 月 14 日にこの世を去った。

府主教キリールは人びとにいった。

「わが子らよ、こころせよ——すでにスーズダリの地の太陽は沈んだのだ。」

修道院長、僧侶、補祭、修道僧、そしてゆたかなる者もまずしき者も多くの人びとがすべて大声をあげて泣いた。

「もはやわれらはほろびるであろう。」

彼の聖なるむくろはヴラヂーミルに運ばれた。すべての聖職者をしたがえた府主教、諸侯、貴族およびすべての人びとは、老いも若きも、ろうそくと香のうをもってボゴリューボフまで出むかえた。多くの人びとが彼のとおとき棺に近づくことをのぞんでひしめき合った。きわめて大いなる泣き声がおこり、多くの嘆きの叫びがあがった。それはいまだかつてなかったほどで、大地もふるえんばかりであった。

このとき記憶にあたいすべきおどろくべき奇蹟がおこった。彼のむくろにたいする聖なる法要がおわったとき、府主教キリールが<sup>75)</sup>侯の手をひろげ教会の書状を置かんとして近づいた。すると侯はあたかも生けるものごとく両手をひろげ、府主教からこの書状を受けとった。<sup>76)</sup>すべての者の上にいと大いなる恐怖がおそった。

そして彼の聖なるむくろは聖アンフィロテウス主教<sup>dd)</sup>の命日にあたる 11 月 23 日に、聖歌、讚美歌とともに聖母生誕教会にほおむられた。父と子と聖霊の三位一体をいまより未来永劫とこしえにたたえつつ、

アーメン。

74) НПЛ = 以下：…この世を去った マデナン

75) НПЛ, ПЛ: このとき記憶にあたいするおどろくべき奇蹟……以下ココマデ、ツギノ埋葬ノ記事ノアトニ入レラレ、ソノアトサラニツギノヨウニツヅク このことは府主教キリールと彼の執事セヴァスチャンによってすべての者につたえられた。兄弟よ、これを聞き、魂なきむくろでありながら、冬の時期にはるかな国から運ばれたこの侯についておどろかぬ者があるか。神は、おのれの生命を捨ててノヴゴロドのため、プスコフのため、それに全ルーシの地のために多くをつくしたおのが聖者を、かくもよみされたのである。コノウチ おのれの生命をすてて……多くをつくした ハ ПЛ = カケテイル

bb) 死の直前修道僧になるのは古代ルーシの侯たちのならわしであった。

cc) 修道僧のうち戒律の最もきびしい位。

dd) Anphilotheus 主教にして殉教者。Tr は Anphilochos とする。